

2009.7.15 / Vol.26

# 1880年代教育史研究会 ニュースレター

第26号

## 目次

### [連載]

神辺 靖光 「学区の思想（補遺2）」…………… 2

### [研究会便り]

#### ◆大会概要

谷本 宗生 「東京・高円寺大会（6月27～28日）報告の概要」 3

#### ◆個人報告概要

田中 智子 「諸学校令体制の再検討—研究史の整理から」…… 5

富岡 勝 「第一高等中学校の寄宿舎自治制導入過程の再考」（仮）  
にむけて」…………… 6

小宮山 道夫 「第三次五高関係史料調査報告」…………… 7

### [史料・文献紹介]

谷本 宗生 「正木直彦『回顧七十年』（1937年）を読んで  
—上京遊学した青年子弟の動向を探る—」… 9

鄭 賢珠 「第三高等中学校教頭松井直吉の活動(3)」…………… 11

[お知らせ]…………… 12

[連載]

## 学区の思想（補遺2）

神 辺 靖 光

一村で小学校一校を建てることができなければ数村連合して建てるしかない。このことはすでに79年の教育令でも認めている。明治17年の『文部省第十二年報』に愛知県の小学区の状況が郡別にくわしく載っている。目立つ例をあげると三河東加茂郡では163箇の町村に26の小学区をつくった。平均6ヶ町村を1小学区にしたことになる。しかし小学校数は28であるから概ね1小学区に1小学校をたてたことになる。これに対し尾張知多郡では89ヶ町村を56小学区にまとめ、100箇の小学校をたてた。つまり1.5ヶ町村を1小学区にしたのだが1小学区に約2校の小学校をたてたのである。

知多郡は1.5ヶ町村を1小学校区にしたのだが、具体的には1町村1小学区と2村1小学区のものであって3村2小学区をつくってはならないのである。それは81年の文部省達1号の「学区ノ境界ハ一町村ノ境界若クハ数町村連合ノ境界ト符合スルヲ要ス（小学校設置ノ区域並ニ校数指示方心得第2条第1項）」によって一町村内の分画が禁止されていたからである。当時の農村は概ね百数十戸とは言え、これらの家々は町のように隣接しているのではない。数戸ごとにまとまっただけで、村中に分散しているのである。それらの群れが組とか結とか言われるもので、後年、<sup>あざ</sup>学の地名になる。a村とb村が連合してA小学区をつくりa村に小学校をつくった場合、b村の子どもはc村の小学校に通った方が近いかも知れない。a村b村の間に小川や急坂があってb、c村間が平坦な場合、低学年児童はc村に通学させたい。連合村の小学区は学校設置維持費の成立を条件にするから児童の通学よりも富裕村、多戸数村に吸い寄せられる。

こうした問題を掲げながら「学区ハ何如ニ編制スベキヤ」という論説があった（1881年「教育雑誌」147号）。筆者は文部省属官の山田行元である。この論説で山田は一村または連合村の境界を学区の境界と合わせることの不可を述べ、

- 1、ある村の一部と他の村の一部で小学区をつくれるようにする。即ち連合村でなくてもよい。
- 2、一村の各部、さきに述べた組、結を一学区として半日学校をつくり、一人の教員が午前と午後二つの半日学校を行き来する。
- 3、一村の各部を一学区として一村2学校をつくり地方税を補助する。

の3提案をしているのである。戸数寡少で広い村域を持つ農村での小学区区画の困難さを熟知した提案と言えよう。

彼はまた、初等、中等、高等8学年の小学校を一小学区に押し込めることの愚を唱え、初等科を各地に、中等高等科を学区の中心にたてよと提案している。これはすでにこの時期、本校と低学年児童のための分校という形で実施され、86年の小学校令以後の町村単位の尋常小学校、郡単位の高等小学校に進展する考え方であった。

80年代の町村は70年代の町村合併をへていたとは言え、江戸時代の町村を基本的に引きずっていた。この町村体制が一変するのは1881年の市制町村制による大規模な町村合併であった。80年代およそ7万1000台で推移した全国の町村数はこの大合併で一挙に1万3000、五分の一に統合されたのである（倉沢剛『小学校の歴史Ⅱ』）。これによって町村を小学校区とする体制が漸く軌道に乗ったのである。

[研究会便り]

## 東京・高円寺大会（6月27～28日）報告の概要

谷本 宗生

梅雨の季節ながら晴れた6月27日（土）、朝10時に高円寺・神辺顧問宅に研究会員が参集し定例研究会を開催した。参加会員は計7人（神辺・荒井・田中・富岡・谷本・三木・小宮山）で、小宮山会員は午後2時ころ広島から新幹線で駆けつけ、三木会員は当日夕方4時過ぎには所用のため急ぎ飛行機で福岡に戻られた。残念ながら、福井・佐喜本・鄭・巖の4会員は欠席であった。次回以降、欠席会員らの近況報告を期待したいと思う。

富岡事務局の司会進行のもと、順次参加会員らの報告が開始された。三木会員の研究報告は、1880年代から90年代へと移行していく九州・佐賀県の中学校の変遷を追う内容であった。佐賀県会では、県費における県下8校の中学校の維持などをめぐって議論検討した結果、県立中学校として佐賀中学校のみが存続したという。質疑応答でも問題視されたが、県会の議論自体の分析考察が三木研究の重要な課題といえる。また、藤津郡にある鹿島中学校が第五高等中学校の「予備門」となったとあるが、その実態の真偽は必要であろう。高等中学校の教員スタッフについて、神辺顧問からも指摘あったが、各教員の経歴や学歴はできる限り解明していくことがもめられる。続いて富岡会員の報告は、ニュース・レターでも取り上げつつある、木下校長下での安達峰一郎ら第一高等中学校生徒の意見をめぐる動きを自治制導入過程とみる内容であった。先行研究上の寺崎昌男や宮坂広作らの説に対して、富岡の仮説-寄宿舎生らの要求を部分的に木下校長が認めたのではないかと、いかに説得力を有する研究となるか期待されることである。質疑のなかでも挙げたが、森文政と第一高等中学校内での上記の動きがどのような関係性を有することになるのか、高等中学校内での

ミクロな分析に加え、より1880年代の教育史像へのアプローチというマクロな視野も必要であろうと思われる。正午過ぎになって休憩に入り、神辺宅で顧問の厚意による出前の鮎（二重）を参加会員は歓談しながら食した。

午後1時過ぎ、予定とおり参加会員の報告を再開した。荒井代表からは、巖会員の著書に対する書評に関して、その作成経緯や問題視した論点などについて報告され、加えて大東大で取得した研究補助費などを活用して、本研究会が収集した高等中学校の関係史料群を「史料集」として刊行（収録・復刻）できないかと提案された。これについて会員間で議論した結果、荒井・三木・佐喜本・小宮山の4会員が「史料集」刊行の編集委員に当たると決めた。また科研費の申請についても、A判定（上位20%）とされながら不採択となり、研究経費の申請額や研究方法の妥当性、研究課題の波及効果・普遍性などに課題があるとし、次回申請時のポイントが会員一同よく理解できた。続いて神辺顧問からは、刊行予定の「研究紀要」では特集テーマの設定が必要であり、「1880年代専門教育と高等普通教育の再編」という主題が提案された。顧問自身の執筆予定である「中学校の性格」や、田中会員の「準官立学校」などがその特集テーマにそう研究論文であろうとした。神辺提案は参加会員らの賛同を概ね得、富岡・田中・鄭3会員の「紀要」刊行の編集委員にその対応を一任することとした。富岡事務局からは、紀要刊行のための計画、その段取りやスケジュールについて提案がなされた。本年7月末を原稿データの提出締切りとし、編集委員らで速やかに取り纏め、会員間での査読等の段取りを経て、東京の印刷所へ回す流れとした。10月に名古屋大学で開催される教育史学会

で、刊行した「紀要」を出来るだけ販売・配布したいと考えている。会員間での質疑応答では、「史料集」や「紀要」の刊行と併せて、本研究会として東北大会に続くかたちで、できれば近い内に学会でのコロキウム開催も検討してはどうかという提案もあった。

初日最後の報告は、不可欠な基礎的作業と位置付ける「諸学校令体制の再検討-研究史整理から-」という田中会員からの報告であった。先行研究として想定される佐藤秀夫や天野郁夫の業績・研究が、どのように高等中学校を実際に認識理解していたのかと大胆にも振り返る内容であった。佐藤や天野らの先行研究では、高等中学校の「公立」「官立」の位置付け、意味合いが曖昧であることがよく確認できたと思う。神辺顧問や荒井代表らからの指摘もあったが、今回の研究史整理は相応に重要なが、刊行予定の「紀要」では「準官立」など本格的な田中論文の執筆を一同期待したいとした。予定の時刻を過ぎ、初日の研究報告の部を終えた。夕方6時過ぎ、神辺顧問の案内で高円寺駅前にあるお鮎店にて懇親会を開いた。懇親の途中残念ながら、教職課程などで多忙な富岡事務局は退出し、新幹線で京都に戻られた。神辺・荒井・田中・小宮山・谷本の5会員は、夜9時近くまでたのしい懇親の一時を過ごした。これにて、初日終了。

続く第2日、曇りがちの空模様で午後過ぎに雨となった28日(日)、朝10時に初日同様神辺宅に田中・谷本・小宮山・神辺の計4会員が集合した。田中会員の司会進行のもとで、参加会員による報告が開始された。小宮山会員からは、もっか精力的に取り組んでいる研究調査、とくに熊本・長崎での史料調査について詳細な報告がされた。すでに収集した史料を活用して、「第五高等中学校創設と設置区域内における議論-1887年8月開催の相談会を手がかりにして-」(2008年)を発表するなどし、教育史学会や中国四国学会などで研究報告も精力的に予定

しているとした。神辺顧問ら一同からは、本研究会の「紀要」刊行にあたって、ぜひ収集した第五高等中学校の史料などを用いて、小宮山会員には生徒や教員の履歴分析に関する研究論文の執筆を期待したいとした。第二、第五の設置区域内の議論については小宮山会員によって、第三の設置区域内の議論は田中会員によって、第四高等中学校の設置区域内の議論については谷本会員によって、それぞれ調査収集した史料に基づいて相応に明らかにすることができたと思う。これは、本研究会員らの活動成果として研究上も評価できよう。谷本会員からの報告は、上京遊学した青年子弟らがどのようにして、大学予備門や第一高等中学校などに進学することになったのか、いわゆる進学予備学校とのかかわりに注目したいとする内容であった。フロアからは、前回大会の報告同様に回顧録や自伝といった史料の性格や内容上なかなかユニークながら、これを具体的にどう教育史の学術研究論文として纏めることができるのか?と指摘があった。司会の田中会員の仲介提案もあり、谷本会員が古書店より入手した新史料、私立東京英語学校生の上田英吉による「遊学日記」をまず紹介分析することが、「紀要」では望ましいのではないかとした。質疑のなかでは、公文書類の着実な調査分析が本研究会でも当然重要であるとしながら、実際に当時の学校に学び、受験・進学した青年子弟らの動向を彼らの視点で分析考察する姿勢も必要であろうと顧問からの助言もあった。予定の時刻を過ぎ、第2日の研究報告の部も終了し、高円寺駅ビル2階にある中華店にて参加会員で昼食を囲んだ。午後2時過ぎには、歓談の昼食会を終え、無事東京・高円寺大会も完結した。この2日間をとおして、ご自宅を会場として快く提供された神辺顧問には感謝したい。

## [個人研究報告]

## 諸学校令体制の再検討 — 研究史の整理から —

田中 智子

研究を進めていく上での基礎作業として、まずは佐藤秀夫氏と天野郁夫氏の業績を検討素材とし、先行研究が諸学校令体制をどのように捉えてきたかを把握することを試みた。その他、寺崎昌男氏などの業績検討も課題となるが、後日を期したい。

佐藤は諸学校令体制を、「森文政」という枠組みで捉え、森論と密接に関わらせて論じる。基本的なスタンスは、A「初代文相森有礼にみる『名譽回復』の系譜」(1979)、B「森有礼の教育政策 再考」(1981)によって示され、ABの出発点となった実証研究に、C「1890年の諸学校制度改革案に関する考察」(1971)がある。これらは「天皇制公教育」の成立時期を問い直し、これを1890～1900年代とするとともに、「啓蒙性」と「過渡期性」のキーワードの下に森を論じ、森を「天皇制公教育」の確立者としての立場から救い出さんとしたものである。しかし、教育内容に関わる思想上の問題と教育行政構想上の問題とが混交しており、特に後者の点における森文政の特質や意義がわかりにくい。

60年代の佐藤の研究に、井上文政の前史として森を扱ったD「井上文政の歴史的 position」E「高等教育会および地方教育会」(1968)、あるいは共同研究「森有礼の思想と教育政策」におけるF「制度改革の基本構造」(1964)がある。DEでは森の教育会構想が井上に連なる「公議の制度化」の端緒であるとされる。Fでは、森の構想における「官」の主導性が強調され、その下に「民」が「自発性」を発揮を容認・要求された存在として位置づけられる。D～Fは佐藤の論集『教育の文化史』に収められず、佐藤の70年代以降の森理解の枠組みとは異質な点も目立つ。例えばA～Cでいわれる「過渡期性」はともかくも、「啓蒙性」という定義との整合性は特に不明である。

しかし、これらの論文は、森を教育内容上の思想からではなく、教育行政構造をどう考えたかという側面から問題にしており、視点としては高く評価される。その議論の妥当性を今日再検討することは、意味が大きいと考える。

天野は国際比較史的視野から、日本の高等教育機関の主流としての「専門学校」に着目し、大学—高等(中)学校という官学(上から)が担ったエリート養成系統とは別の系統(私学中心(「下から」)、マス教育につながるもの)を成したと位置づけ、この二系統の展開過程として近代日本高等教育史を語る。「天皇制教育」のタームは登場せず、産業化や社会構造の変化が重視される。以上から画期と捉えられるのは、専門教育編成を本格的に課題とした井上文政であり、その前史として理解される森文政は、大学—高等(中)学校系統のモデルを提示したことに求められている。

佐藤にしても天野にしても、森文政期の高等学校については、確たる位置づけができていないと感じる。佐藤の場合、その下で私学は制限されたのか、放任されたのか、奨励されたのか、見解は揺れている。また、官立・公立・私立という「セクター」の問題を意識的に取り上げた点で評価される天野も、公立「セクター」の最も充実した活動であった医学学校を官立校の一部に組み込んで奪ったものとみなすが(「公立医学校撲滅策」)、必ずしも高等学校=官立とは構想してはおらず、国と府県との経費連合支弁制や諸学校通則を伴っていた森文政の意図と、その政策が結果的に招来したところとは峻別する必要がある。高等学校体制の下での公立・私立の位置づけについて、今後具体的に検討していくことを自らの研究課題としたい。

## [個人研究報告]

## 第一高等中学校の寄宿舎自治制導入過程の再考(仮)にむけて

富岡 勝

6月の東京大会では、研究会の紀要第1号にむけて執筆中の論文の構想を報告した。これから何とかして論文が完成する予定なので、今回の記事は、当日のレジюме概要と、いただいたコメントの主要なものを紹介したい。

レジюмеの概要

はじめに

1880年代末から1890年代にかけて、普通教育の機能が変化した？

学科を通しての教育に加えて、寄宿舎やスポーツ・文化活動など、学科外の学校生活を通じての人間形成に学校が積極的な位置づけをするようになってくるのではないかと。森有礼の三気質や監督主義との連続性(学校生活を通しての人間形成)と非連続性(監督主義の一部修正としての寄宿舎自治や校友会?)

\*これらは3年間ほどで検討していく

教頭就任演説と自治演説とのギャップ(宮坂広作も指摘)

寄宿舎自治は木下が発案したものなのか？

その転換は、だれが起こしたか？

宮坂広作説……赤沼金三郎？

寺崎昌男説……木下？

富岡の本論での考察……数名の寄宿舎生の要求を木下が条件付きで支持したのではないかと

## 1. 教頭就任演説前後の状況

野村彦四郎校長、古荘嘉門校長(とくに、1888年8月以前)

**史料1** 賄騒動の舎監による記録(1888年2月1日)

木下の認識

**史料A** (1890年6月) 教員の人格で生徒を感化できない→規則に頼る→教員と生徒の距離が広がり、

生徒は不満、生徒の特性を涵養するのが難しい

## 2. 生徒からの意見書

**史料B** 1889年6月頃 安達峰一郎(仏法科2年生)

**史料C** (田原豊(英予科2級生徒総代)「意見書」(1889年7月2日))

**史料D** (独予科二級五組生徒 1889年4月20日)

**史料E** (生徒総代 1889年11月28日)

結論

**コメント1** 「正岡子規の『筆まかせ』や正木直彦の『回顧七十年』など、後の著名人の著作に、関連した記述がある」→なるほど、その通りですね。さっそくチェックしました。

**コメント2** 「森文政の教育との関係を分析できるかどうか、がポイントになってくる」→森文政の高等普通教育や高等教育の政策分析自体も未解明なので、大変だが、ここ数年間で政策分析と実態分析とを同時に進めながら分析したい。

**コメント3** 「東京大学と予備門の明治16年事件と、1888年の賄征伐とは、歴史的にどのように異なるのか」→ たしかに、第一高等中学校の中での個別事情を明らかにするだけでなく、1880年代の流れの中でとらえていきたい。

**コメント4** 「1880年代に、中学校が大規模になってきた流れと関連があるのではないかと。大規模校になってきたために、生活指導や寄宿舎などが重視されるようになってきたのではないかと。この意味で、藩校-1880年代前半の中学校-1880年代後半からの中学校・高等中学校の比較が重要」→ 魅力的な視点なので、今後ぜひ取り組んでみたい。

今回は特に重要なコメントをいただいたように感じている。紀要第1号だけで明らかにすることは難しいが、コメントに応えようと数年間かけて取り組

むことが、実態史と政策史との接点をつくることに  
もつながるのではないかと、思い始めた。張り切っ

て取り組んでいきたい。

## [個人研究報告]

### 第三次五高関係史料調査報告

小宮山 道夫

2007年9月4日の1880年代教育史研究会合同調査(第一次)、2008年6月5日～6日の会合同調査(第二次)に引き続き、2009年6月17～21日にかけて、平成20年度科学研究費補助金(若手研究B・課題番号20730501)に基づく第三次の調査を実施した(但し荒井・佐喜本両会員による調査や故中野実代表の調査を含めれば更に回数は増える)。

今回はこれまでの熊本大学五高記念館における調査の補足と、医学部関係資料の確認とを目的とした。このため調査先に長崎県を加え、長崎大学附属図書館医学分館および長崎県立長崎歴史文化博物館を訪れた。以下、調査の概略を示す。

#### (1) 長崎大学附属図書館医学分館

長崎大学はよく知られるように1945年8月9日に原爆被災により壊滅的な被害を受けた。第五高等学校医学部以来の長崎医科大学の敷地であった坂本地区は、現在平和公園となっている爆心地の南東方向約500mに位置し、897名の学生・教職員が原爆の犠牲となった(長崎大学関連の犠牲者としては他に長崎師範学校54名、長崎高等商業学校27名、長崎青年師範学校1名があり、合計979名となる)。このため医科大学の史料は学校文書を含めすべて失われたと理解されている。

筆者もその前提でこれまで調査を行うことはなかったが、同大附属図書館が公開中の「長崎学デジタルアーカイブズ」<<http://www.lb.nagasaki-u.ac.jp/search/ecolle/nagasaki.html>>にはボードイン・コレクション(日本古写真アルバム、ボードイン講義録を含む)、近代黎

明期翻訳本、幕末・明治期日本古写真コレクション、近代医学史関係資料、医学和漢古書目録など、医科大学をはじめ旧制諸学校が所蔵していたと思われる貴重なコレクションが含まれていることに気づかされる。そこで同大総務部総務課(情報公開窓口)と附属図書館医学分館に明治期の史料に関する問い合わせを行った。総務課の説明では学校文書はすべて被爆で失われ疎開などの措置がとられたという話も聞いたことがないとのことであった。一方医学分館の説明では、長崎医学のルーツに関わる重要な歴史的史料は戦時中に佐賀県内に疎開して難を逃れたとのことであり、それらを所蔵しまた一部については戦後に収集を続けてコレクションを形成し公表しているとの回答であった。また若干であるが目録化していない史料もあるとのこと、近代医学史関係資料については「貴重資料台帳」(目録)を提供いただき(研究会にて配布済)、簿外の史料についても調査当日に用意していただくことが出来た。

台帳記載資料については、014\_長崎医学校卒業証書第二号他、015\_長崎医学校卒業証書第三十号他、017\_長崎医会議事録、055\_長崎全医学校病院職員録、200\_第五高等学校医学部卒業証書第百三十六号(明治30)、201\_第五高等学校医学部卒業証書第八拾四号(明治29)、202\_医術開業免状\_栗本嘉頭雄(明治30)、203\_第五高等学校医学部第二回卒業生名簿、204\_長崎新報\_第二千百五十六号(明治29年11月4日)、242\_青木義勇\_長崎県立甲種医学校(明治17年—明治21年卒業生名簿遺脱者調査)を閲覧・撮影した。

簿外の史料については、金30円を寄附した者に対し県知事が奇特を賞し「木杯一個」を下賜した目録「第五高等学校医学部建設費寄附関係（明治24）」や「長崎医学学校算学卒業証書（明治12）」、「長崎医学学校卒業証書（明治14～15）」を閲覧・撮影した。

そのほか、図書館の開架スペースに第五高等学校<sup>けんようかい</sup>医学部研瑤会の雑誌『研瑤会雑誌』（明治25年7月創刊）、瓊浦<sup>たまうら</sup>医学会の雑誌『瓊浦医学会雑誌』（第3号、複製、明治23年）が所蔵されている。『研瑤会雑誌』は季刊誌で研瑤会は後に長崎医学会となる。

「医学部記事」として、新築移転式併第三回卒業証書授与式概況（文部省参事官長井久一郎や文部次官辻新次の祝辞、校長嘉納治五郎、医学部主事吉田健康、生徒総代等の挨拶が詳細に掲載されている）、医学部の卒業生一覧などを掲載。「雑報」内にも医学部の状況を伝える記事があり、参考となろう。

## （2）長崎県立長崎歴史文化博物館

長崎歴史文化博物館の所蔵する行政文書については、同館の設ける検索システム（WEB公開版と館内限定版の2種あり）と紙目録の長崎県立図書館編『郷土資料目録』（上下巻）により関連資料を請求することになる。

検索システムは同館WEBサイトの県内情報検索く[http://www.nmhc.jp/search\\_pref/top/index.html](http://www.nmhc.jp/search_pref/top/index.html)で利用できるが、データ辞書の作り込みの問題か、検索語に対し脈絡の不明な検索結果が表示される場合があったり、検索結果の表示順が指定できなかつたりと、満足のいく検索結果を得るためには若干の慣れが必要である。なお利用時に特に案内はされないが、館内限定版の検索システム（向かって右端の端末）は資料請求票を印刷できるので、そちらの使用をおすすめする。

『郷土資料目録』の郷土資料分類表は、11 宗教・哲学・教育、12 文学・語学、13 歴史・伝記・地誌・紀行、14 政治・法律・経済・財政・社会・風俗・統計、15 数学・理学・医学、16 工学・工芸・兵事、

17 産業・商業・交通・通信、18 美術・家事・諸芸及遊技・武術、19 事彙・叢書・随筆・書目・書史・解題・雑書・新聞・雑誌、2 洋書、3 地図・絵図、4 器具の12項目に区分され、十進分類法（NDC）とも異なった独自のものである。学事に関しては11の教育（学校教育）の項で学校文書を、14の政治（行政）の項で行政文書を隈無く探す必要がある。また簿冊名の50音順に配列されているため、例えば「第一課事務簿」（明治38年）の周囲に「大音寺朱印状控」（享和3年）や「退役併相続一件書留」（天保6年）などが並ぶことになる。長崎県学事年報については14の統計の項をみる必要がある。

検索システムと紙目録ともかなり癖があり、現状では旧目録と同館での目録との完全一致ができていない様子で、たまに請求史料とは違うものが出てくることもある。指定管理者制度のせいかな適切なサポートも得難い雰囲気もあるなど、短時間での調査では自ずと限界がある。しかしかつて県立図書館に所蔵されていた行政文書はすべてこちらに移管され、閲覧が可能となっているので、通い詰めることさえできれば所蔵資料の質・量といい閲覧環境といい非常によい施設である。なおデジタルカメラによる撮影は簿冊1点につき200円、電子式複写（コピー機による紙出力）は1枚10円となっている。利用者を見かけたのだが接写台を借りることができるようである。

同館では、明治18年に発足した長崎県有志教育会の雑誌「長崎県有志教育会雑誌 第壹号」（11-36-1・森の文部大臣就任、明治18（1885）年12月28日の文部省改革、東京大学の別課での騒動など、官報や東京日々新聞、郵便報知などを情報源とした記事や「医学校講堂新築及卒業証書授与式」の記事（明治19（1886）年1月11日）など県内の情報が比較的細かく記載されている）、長崎県第二部学務課が明治19年12月時点での長崎県内の学校の沿革と現状を記載した文書「本県下教育沿革史」（11-142-2-2・長崎

医学校を筆頭に旧藩由来の学校を列記)、教職員の異動に関する内容が中心だが、長崎医学校の定期試験結果なども含む文書「学務課決議簿 学校職員進退ノ部 共六第四」(11-404-1) や、職員異動を記載した「学務課決議簿 学校職員進退ノ部 共六第六」(11-404-3)、諸学校の制度改正などを綴った「学務課常務掛事務簿 学制ノ部」(11-434-1~5)、教育経費に関する文書「学務課報告掛事務簿 教育費金之部 共四第四」(11-478)、県会議事録にあたる印刷

物「県会日誌」(14-21-19~23)などを閲覧し、必要に応じて目次と該当部分を撮影した。

### (3) 熊本大学五高記念館

今回は原則として『五高関係史料目録』の「書類関係一般」「事務関係」に分類された明治20年代前半の書類を中心に閲覧申請を行った。未だ『五高関係史料目録』と一致しない部分があるが、明治20年代前半についてはこれまでの史料である程度網羅できたものと考えられる。

## [史料・文献紹介]

### 正木直彦『回顧七十年』(1937年)を読んで

#### -上京遊学した青年子弟の動向を探る-

谷本 宗生

今回は、正木直彦(1862~1940年)の自叙伝『回顧七十年』(1937年)から、郷里の堺から上京してきた正木青年の動向(進路選択・生活環境など)について注目してみたいと思う。正木は、第一高等中学校(1889年)、帝国大学法科大学(1892年)を卒業後、奈良県尋常中学校長等を経て、東京美術学校長に就任(1901年)し、以来32年間校長を務めた人物である。

地元郷里での正木は、「工業方面の研究で身を立てたいと思ひ、秘かに工部大学[校]に入る事を考へてゐたのであつたが、家に余裕が無いので、一時学校の教員をしてゐたのであつた」(同上書、56頁)と述べている。1883年2月、「教員在職中の月給を家で貯蓄して置いて呉れたのを唯一の学資」にあて、「断然上京を決意し」という。神戸から「名護屋丸」という船で一路東京を目指した。上京した正木は、受験・進学する以前に同人社や共立学校といった私立の学校に在籍する。同人社に在籍したのは、『西国立志篇』で高名な中村敬宇の教えをぜひ受けたいと考えたからであつたが、「中村先生は御自身では一度も教場へ出て教授せられない」(59頁)ため、

正木は同人社構内にあつた中村の自宅を決意して訪問したという。期待した中村との面会では、中村から「早く帰つて勉強せい」(60頁)と一喝されてしまう。上京した当初、堺から一緒に出てきた友人と神田に下宿した正木は、「静かな場所に素人下宿でも見付けよう」(61頁)と物件探しに出かける。上野では、寛永寺とは知らず下宿ができるかと尋ねたところ、「寛永寺ぢや。書生の下宿等とは飛んでも無い」(62頁)と断られる。次に小石川では、菜の花畠のなかにある小さな茅葺き屋根の家を閑静な百姓家と勝手に思い、下宿の打診をしたところ、「此処は福岡[孝弟]文部卿のお屋舗ぢや。馬鹿者奴!書生の自炊等とは以つての外ぢや!」(62~63頁)と怒鳴りつけられる。

上京した年、工部大学校の移管・廃止という噂を聞き、「仕方が無いので、大学予備門に入ることにし」(71頁)たいと考え、その準備のため共立学校に移籍する。同じころ、共立学校には、山座円次郎、床次竹二郎、福原鎌二郎、水野鍊太郎らが在籍していた。同年の冬、正木は「来年は是非予備門に入学したい」(72頁)として、友人と2人で箱根の温泉宿

に試験勉強のため長期逗留する。翌84年9月の大学予備門第四級の入学試験を受け、受験者1200人中、合格者英語114人、独語30人で、正木は英語の首席合格であったという。予備門に入学した当時の校長は、杉浦重剛であった。学資が乏しい正木は、自ら「稼がなくちやならん」(106頁)として、同じく貧乏書生であった山座円次郎とともに杉浦校長に「何とかして戴きます」と迫ったところ、杉浦と関係深い神田の東京英語学校などの夜学教師としてバイトできるよう尽力してくれたという。第一高等中学校に改組されると、野村彦四郎校長下では「ただ蛮的に権力を以つて押へつけようとした」(107頁)とし、「賄征伐とか、其の人の腹心の舎監を、夜おそく蒲団に包んで舁ぎ出して池へ投げ込む」など、生徒らの反発・動揺が絶えなかったと、正木は述べている。

1889年、第一高等中学校を卒業した正木は帝国大学法科大学に進学する。当時まだ制定されたばかりの制服制帽を、「得意で堪らない」(78頁)正木らは「それを冠つて揃つて旅行をしようではないか」(78~79頁)とし、福原鎌二郎ら友人10人で筑波山周辺を散策に出かける。和服に制帽や背中に日本刀を背負うなど異様な姿であって、これをみた周囲の住人らが直ぐに巡査を呼び、彼らは警察に連行されてしまう。警察では、「お前達は加波山暴動の残党だらう！」(80頁)と尋問を受け、正木らは帝大生であると反論したが受け入れられず1晩拘留されたという。「大学の制服制帽といふものは、未だ出来たばかりで、田舎の警察などでは誰も一度も見た事が無い。その為になかなか疑が晴れ」なかったと、正木は述べている。その後大学を卒業した正木は、上京以来懇意としていた大隈重信から早稲田での教師にと要請されるが、「堺といふところには代々殿様といふものが無く、割合自由な空気成長して来…それだけに、今更、殿様を持つのは堪らんと思つた」(122頁)とし、その返事をしなかったという。間もなく喫煙

が原因で吐血し、養生を強いられる。そうしているうちに、堺時代から懇意としていた税所子爵から突然、次のような手紙を受け取る。「奈良県知事の小牧昌業から、県下に中学校が分立してをり、学校騒動が頻発するので、今度全部を合併して、奈良県中学校といふのを作つた。形は出来たが、その校長に困つた。誰か適任者があつたら推挙して戴きたい、と相談されたので、お前を推薦したから直ぐ来い」(123頁)という内容で、「止むを得ず」正木は1893年10月、奈良県の中学校長に赴任する。

ここまで紹介した正木の回顧からみても、当時上京遊学してきた多くの青年子弟の動向について、いくつかその特徴・傾向がうかがえるように思う。(1) 下宿について。親しい友人らと共有しながら、下宿生活を行っていたようである。そして、その下宿先も何度か転居を重ねたのではないだろうか。(2) アルバイトについて。学資も乏しい苦学生らにとっては、勉学を続けていくうえでも某かの仕事をして、お金を稼ぐしかなかったはずである。(3) 余暇・趣味について。散策をはじめ、旅行をししばしば友人らとともに行っていたようである。(4) 在籍した私立の学校について。上京してきた多くのものは、目標とする受験・進学を控えて、公立学校などの私立の学校に在籍して準備期間・進学猶予期間を過ごしたといえる。同人社から公立学校へ移籍するなど、何度か在籍する学校を変えたのではないだろうか。(5) 就職先の選定について。上京以前から抱いていた目標を貫徹し得たものもいたであろうが、進学した学校を卒業した後、どのように自らの就職を決めたのか。地縁、血縁、人的なつながりがそこにどのように影響したのであろうか。学校卒(学士)といった学歴だけでなく、+αの力学がなんらかその人物に働いて就職先が実際に選定されたのではないかと思われる。

## [史料・文献紹介]

## 第三高等中学校教頭松井直吉の活動

## — 『神陵史』、『史料神陵史』から見る区域内尋常中学校視察—

鄭 賢 珠

松井直吉の出張先が主に第三高等中学校設置区域内の尋常中学校、文部省召集による定期的な上京であったことは前号で述べたとおりである。本号では、松井の活動を位置づける作業の一環として、特に区域内尋常中学校への出張に関する『神陵史』、『史料神陵史—舎密局から三高まで—』の記述を再読してみる。

これらの文献によると区域内中学校への巡視が始まったのは、大阪中学校時代であり、「本年定期上京之節沿道諸県下学校巡視之件」に基づいて次のように説明している。

「当校改称せられて中学科を置かれ、一般諸府県の模範と成さしめられた当局の御趣旨を体任して各方面に互る改革に着手してゐるが、取敢えず教則等撰定して己に御裁を仰いだ事であるが、その学科課程より授業の方法等に至るまで勉めて高尚確実を主とし、欧米の成規を採り、また本邦の実際に徴して、実地適切なる教育を行はうとしてゐる。併し当校が模範学校となるべきに就いては、地方の諸学校とも近密親接する必要がある、若し之に迂遠なる時は、教則が如何に高尚であり授業法が立派でも、実際教育に支障を生じ、模範の趣旨にも背戻する事少ない。自分は中学校長の任を嘱せられて地方教育の状況を実験し度いと思つてゐたが、その機を得なかつた次第で、定期上京（五月）の頃は幸にして校務も暇間の時であるから、日数凡そ二週間の見積りで沿道諸県即ち滋賀・三重・岐阜・愛知・静岡等の諸学校（師範学校・中学校及び一二の首立たる小学校）を巡視し、以て地方教育の状況の一端を窺ひ、實際教授に於いても参考となる事があると思ふから、右の儀を御允可願ひたい、といふのである。かうして

校長の上京沿道の学校巡視が開始せられたのである」（『史料神陵史』471～472頁、原史料は京都大学大学文書館所蔵「明治十四年文部省伺指令本紙大阪中学校」所収）。

すなわち、地方諸学校との緊密な接触と地方教育の状況を把握する必要性を唱えた学校長折田彦市が1881年3月に定期上京〔毎年5月—筆者〕の際に沿道諸府県の諸学校を巡視することを文部省に上申した。そこから、滋賀・三重・岐阜・愛知・静岡などの諸学校への巡視が始まった、としている。視察先には、中学校だけでなく師範学校や小学校をも含めていた。

次に、視察についての記述が登場するのは、中島永元が学校長に就任した後、第三高等中学校の京都への移転準備が進むなかでのことである。

「〔1887年〕二月には、先述した如く聖上陛下御臨幸の事があり、本校と西京との往復は一段と頻繁となつたが、その間を利用して二月十八日には、学校長は助教諭山崎旨重を随へて西京に中学校巡視を行ひ、即日帰阪、又二月廿三日には和歌山県下へ中学校実況視察に赴き、三月六日には徳島県下へ出張して、同八日に帰阪し、三月十日には大阪府下郡山並滋賀・岐阜・三重三県へ出張、十六日帰阪。更に廿一日には汽船にて岡山・広島各県へ出張するところがあつた。これらの巡視は云ふまでもなく上記開申の趣旨〔1887年1月24日中島から文部次官辻新次宛ての「第三高等中学校設置区域内各府県巡視之儀ニ付上申」〕のもとに行われたのであるが、換言すれば移転に際しての一つの事務的な準備であつて、本校が新なる出発をなすに当つて、管下に於ける尋常中学校に対して一層の認識を深めんとするに他な

らないのである」(615頁)

第三高等中学校の移転に際して、管下の尋常中学校との関係をより密接にするために行われていた、とのことである。なお、尋常中学校との連繋として、尋常中学校長の召集についての説明も行われている(653頁)。

これは『神陵史』の記述でよりコンパクトにまとめられている。

「この年〔1887年〕二月から三月にかけて、本校では、区域内中学校の実況視察を行なった。このような学校巡視は、すでに大阪中学校当時に先例があり、なかば恒例化していたが、この際管下尋常中学校に対する認識を深めるのに、与って大いに力があつたわけである。このあと校長更迭の四月以降も、

この管下中学校巡視は、京都移転準備の繁忙の間を縫って、ひきつづき行われている」(209頁)

要するに、区域内中学校に対する学校巡視が、①大阪中学校から行われていたこと、②学校長が中心に行われていた、③恒例化していた、との指摘である。

確かに、「日誌」類をみると中学校への巡視記録は毎年見られ恒例化といえる。ただ、このような視察形態が他の高等中学校と少し違う様相をみせている。それは、学校長である折田の不在とも関連するのではないだろうか。

#### [お知らせ]

ニューズレター27号の締切日は、2009年9月30日(水曜日)です。よろしくお願いたします。(鄭)

「1880年代教育史研究会」ニューズレター 第26号 2009年7月15日発行

<研究会連絡先> 富岡勝 「1880年代教育史研究会」事務局  
〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学教職教育部 富岡勝研究室 気付  
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

<HP> <http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/>

<原稿送付先> 鄭 賢珠

〒606-8172 京都市左京区一乗寺河原田町37-1-413

E-mail: hyunjjung4@hotmail.com